

オツベルと象

宮沢賢治



……ある牛飼うしかいがものがたる

第一日曜

オツベルときたら大したもんだ。稲扱いねこぎ器械の六台も据すえつけ
て、のんのんのんのんと、大そろしない音をたててやつ
ている。

十六人の百姓ひやくしやうどもが、顔をまるつきりまつ赤にして足で踏ふん
で器械をまわし、小山のように積まれた稲を片つぱしから扱こい
て行く。藁わらはどんどんうしろの方へ投げられて、また新らしい
山になる。そこらは、粃もみや藁わらから発たったこまかな塵ちりで、変にぼ
うつと黄いろになり、まるで沙漠さばくのけむりのようだ。

そのうすくらしい仕事を、オツベルは、大きな琥珀こはくのパイプ

をくわえ、吹殻ふきがらを藁わらに落さないよう、眼めを細くして気をつけながら、両手を背中に組みあわせて、ぶらぶら往いったり来たりする。

小屋はずいぶん頑丈がんじょうで、学校ぐらいもあるのだが、何せ新式稲扱器械が、六台もそろってまわってるから、のんのんのんのんのんのんふるうのだ。中にはいるとそのため、すっかり腹すが空すくほどだ。そしてじつさいオツベルは、そいつで上手に腹をへらし、ひるめしどきには、六寸ぐらいのビフテキだの、雑巾ぞうきんほどあるオムレツの、ほくほくしたのをたべるのだ。

とにかく、そうして、のんのんのんのんのんのんのんやっていた。

そしたらそこへどういうわけか、その、白象がやって来た。白い象だぜ、ペンキを塗ぬったのでないぜ。どういうわけで来たかって？ そいつは象のことだから、たぶんぶらつと森を出て、

ただなにとなく来たのだろう。

そいつが小屋の入口に、ゆっくり顔を出したとき、百姓どもはぎよつとした。なぜぎよつとした？ よくきくねえ、何をしだすか知れないじゃないか。かかり合つては大へんだから、どいつもみな、いつしようにけんめい、じぶんの稲を扱っていた。

ところがそのときオツベルは、ならんだ器械のうしろの方で、ポケットに手を入れながら、ちらつとすろど鋭く象を見た。それからすばやく下を向き、何でもないといいふうで、いままでどおり往つたり来たりしていたもんだ。

するとこんどは白象が、片脚床かたあしゆかにあげたのだ。百姓どもはぎよつとした。それでも仕事が忙いそがしいし、かかり合つてはひどいから、そつちを見ずに、やつぱり稲を扱っていた。

オツベルは奥おくのうすくらいところで両手をポケットから出し

て、も一度ちらつと象を見た。それからいかにも退屈たいくつそうに、わざと大きなあくびをして、両手を頭のうしろに組んで、行ったり来たりやっていた。ところが象が威勢いせいよく、前肢まえあし二つつきだして、小屋にあがつて来ようとする。百姓どもはぎくつとし、オツベルもすこしぎよつとして、大きな琥珀のパイプから、ふつとけむりをはきだした。それでもやつぱりしらないふうで、ゆつくりそこらにあるいていた。

そしたらとうとう、象がこのこ上つて来た。そして器械の前のところを、呑気のんきにあるきはじめたのだ。

ところが何せ、器械はひどく廻まわっていて、糸もみは夕立か霰あられのよううに、パチパチ象にあたるのだ。象はいかにもうるさいらしく、小さなその眼を細めていたが、またよく見ると、たしかに少しわらっていた。

オツベルはやつと覚悟をきめて、稲扱器械の前に出て、象に話をしようとしたが、そのとき象が、とてもきれいな、驚みたうぐいすいない声で、こんな文句を云つたのだ。

「ああ、だめだ。あんまりせわしく、砂がわたしの歯にあたる。」
まったく粉は、パチパチパチパチ歯にあたり、またまっ白な頭や首にぶつつかる。

さあ、オツベルは命懸けだ。パイプを右手にもち直し、度胸を据えて斯う云つた。

「どうだい、此処は面白いかい。」
こゝこ おもしろ

「面白いねえ。」象がからだを斜めにななにして、眼を細くして返事した。

「ずうつとこつちに居たらどうだい。」

百姓どもははつとして、息を殺して象を見た。オツベルは云つ

てしまつてから、にわかにながたがた顫え出す。ところが象はけろりとして

「居てもいいよ。」と答えたもんだ。

「そうか。それではそうしよう。そういうことにしようじゃないか。」オツベルが顔をくしゃくしゃにして、まっ赤になつて悦びながらそう云つた。

どうだ、そうしてこの象は、もうオツベルの財産だ。いまに見たまえ、オツベルは、あの白象を、はたらかせるか、サーカス団に売りとばすか、どっちにしても万円以上もうけるぜ。

第二日曜

オツベルときたら大したもんだ。それにこの前稲扱小屋で、

うまく自分のものにした、象もじつさい大したもんだ。力も二十馬力もある。第一みかけがまっ白で、牙きばはぜんたいきれいな象牙ぞうげでできている。皮も全体、立派じょうぶで丈夫な象皮なのだ。そしてずいぶんはたらくもんだ。けれどもそんなに稼かせぐのも、やっぱり主人えらが偉いのだ。

「おい、お前は時計は要いらないか。」丸太で建てたその象小屋の前まへに来て、オツベルは琥珀のパイプをくわえ、顔をしかめて斯きう訊きいた。

「ぼくは時計は要いらないよ。」象がわらつて返事した。

「まあ持つて見ろ、いいもんだ。」斯きう言いながらオツベルは、ブリキでこさえた大きな時計を、象の首からぶらさげた。

「なかなかいいね。」象も云いう。

「鎖くさりもなくちやだめだろう。」オツベルときたら、百キロもある

鎖をき、その前肢にくつつけた。

「うん、なかなか鎖はいいね。」三あし歩いて象がいう。

「靴をはいたらどうだろう。」

「ぼくは靴などはかないよ。」

「まあはいてみる、いいもんだ。」オツベルは顔をしかめながら、赤い張子の大きな靴を、象のうしろのかかとはめた。

「なかなかいいね。」象も云う。

「靴に飾りをつけなくちゃ。」オツベルはもう大急ぎで、四百キロある分銅を靴の上から、穿め込んだ。

「うん、なかなかいいね。」象は二あし歩いてみて、さもうれしそうにそう云った。

次の日、ブリキの大きな時計と、やくざな紙の靴とはやぶけ、象は鎖と分銅だけで、大よろこびであるいて居った。

「済まないが税金も高いから、今日はすこうし、川から水を汲んでくれ。」オツベルは両手をうしろで組んで、顔をしかめて象に云う。

「ああ、ぼく水を汲んで来よう。もう何ばいでも汲んでやるよ。」象は眼を細くしてよろこんで、そのひるすぎに五十だけ、川から水を汲んで来た。そして菜つ葉の畑にかけた。

夕方象は小屋に居て、十把の藁をたべながら、西の三日の月を見て、

「ああ、稼ぐのは愉快だねえ、さつぱりするねえ」と云つていた。

「済まないが税金がまたあがる。今日は少うし森から、たきぎを運んでくれ」オツベルは房のついた赤い帽子をかぶり、両手をかくしにつつ込んで、次の日象にそう言った。

「ああ、ぼくたきぎを持って来よう。いい天気だねえ。ぼくはぜんたい森へ行くのは大すきなんだ」象はわらってこう言った。オツベルは少しぎよつとして、パイプを手からあぶなく落としそうにしたがもうあのときは、象がいかにも愉快なふうで、ゆつくりあるきだしたので、また安心してパイプをくわえ、小さな咳せきを一つして、百姓どもの仕事の方を見に行つた。

そのひるすぎの半日に、象は九百把たきぎを運び、眼を細くしてよろこんだ。

晩方象は小屋に居て、八把の藁をたべながら、西の四日の月を見て

「ああ、せいせいした。サンタマリア」と斯こうひとりごとしたそうだ。

その次の日だ、

「済まないが、税金が五倍になった、今日は少うし鍛冶場かじばへ行つて、炭火を吹ふいてくれないか」

「ああ、吹いてやろう。本気でやったら、ぼく、もう、息で、石もなげとばせるよ」

オツベルはまたどきつとしたが、気を落ち付けてわらつていた。

象はそのそ鍛冶場へ行つて、べたんと肢を折つて座りすわ、ふいごの代りに半日炭を吹いたのだ。

その晩、象は象小屋で、七把わの藁をたべながら、空の五日の月を見て

「ああ、つかれたな、うれしいな、サンタマリア」と斯う言つた。

どうだ、そうして次の日から、象は朝からかせぐのだ。藁も

昨日はただ五把だ。よくまあ、五把の藁などで、あんな力があるもんだ。

じつさい象はけいぎいだよ。それというのもオツベルが、頭がよくてえらいためだ。オツベルときたら大したもんさ。

第五日曜

オツベルかね、そのオツベルは、おれも云おうとしてたんだが、居なくなつたよ。

まあ落ちついてききたまえ。前にはなしたあの象を、オツベルはすこしひどくし過ぎた。しかたがだんだんひどくなくなったから、象がなかなか笑わなくなつた。時には赤い竜りゅうの眼をして、じつとこんなにおツベルを見おろすようになってきた。

ある晩象は象小屋で、三把の藁をたべながら、十日の月を仰あおぎ見て、

「苦しいです。サンタマリア。」と云つたということだ。

こいつを聞いたオツベルは、ことごと象につらくした。

ある晩、象は象小屋で、ふらふら倒たおれて地べたに座り、藁もたべずに、十一日の月を見て、

「もう、さようなら、サンタマリア。」と斯う言った。

「おや、何だつて？ さよならだ？」月が俄にわかに象に訊きく。

「ええ、さよならです。サンタマリア。」

「何だい、なりばかり大きくて、からつきし意い気く地じのないやつだなあ。仲間へ手紙を書いたらいいや。」月がわらつて斯う云つた。

「お筆も紙ありませんよう。」象は細ういきれいな声で、しく

しくしく泣き出した。

「そら、これでしよう。」すぐ眼の前で、可愛い子どもかあいの声こゑがした。象が頭を上げて見ると、赤い着物の童子が立って、硯すずりと紙を捧たかげていた。象は早速手紙を書いた。

「ぼくはずいぶん眼にあつている。みんなでて来て助けてくれ。」

童子はすぐに手紙をもつて、林の方へあるいて行つた。

赤衣せきいの童子が、そうして山に着いたのは、ちょうどひるめしごろだつた。このとき山の象どもは、沙羅樹さらじゆの下したのくらがりで、碁ごなどをやっていたのだが、額ぬかをあつめてこれを見た。

「ぼくはずいぶん眼にあつている。みんなでてきて助けてくれ。」

象は一せいに立ちあがり、まつ黒になつて吠ほえだした。

「オツベルをやつつけよう」議長の象が高く叫ぶと、
「おう、でかけよう。グララアガア、グララアガア。」みんなが
いちどに呼応する。

さあ、もうみんな、嵐あらしのように林の中をなきぬけて、グララア
ガア、グララアガア、野原の方へとんで行く。どいつもみんな
きちがいだ。小さな木などは根こぎになり、藪やぶや何かもめちや
めちやだ。グワア　グワア　グワア　グワア、花火みたいに野
原の中へ飛び出した。それから、何の、走って、走って、とう
とう向うの青くかすんだ野原のはてに、オツベルの邸やしきの黄いろ
な屋根を見附みつけると、象はいちどに噴火ふんかした。

グララアガア、グララアガア。その時はちようど一時半、オ
ツベルは皮しんたいの寝台の上でひるねのさかりで、鳥からすの夢ゆめを見ていた
もんだ。あまり大きな音なので、オツベルの家の百姓どもが、

門から少し外へ出て、小手をかざして向うを見た。林のような象だろう。汽車より早くやってくる。さあ、まるつきり、血の気も失せてかけ込んで、

「旦那だんなあ、象です。押し寄せやした。旦那あ、象です。」と声をかぎりかぎりに叫んだもんだ。

ところがオツベルはやつぱりえらい。眼をぱつちりとあいたときは、もう何もかもわかつていた。

「おい、象のやつは小屋にいるのか。居る？ 居る？ 居るのか。

よし、戸をしめろ。戸をしめるんだよ。早く象小屋の戸をしめるんだ。ようし、早く丸太を持って来い。とじこめちまえ、畜生ちくしやうめじたばたしやがるな、丸太をそこへしぱりつけろ。何ができるもんか。わぎと力を減らしてあるんだ。ようし、もう五六本持って来い。さあ、大丈夫だ。大丈夫だとも。あわてるなつた

ら。おい、みんな、こんどは門だ。門をしめろ。かんぬきをかえ。つつぱり。つつぱり。そうだ。おい、みんな心配するなつたら。しつかりしろよ。」オツベルはもう支度したくができて、ラツパみたいないい声で、百姓どもを上げました。ところがどうして、百姓どもは気が気じゃない。こんな主人に巻き添ぞいなんぞ食いたくないから、みんなタオルやはんげちや、よごれたような白いようなものを、ぐるぐる腕うでに巻きつける。降参をするしるしなのだ。

オツベルはいよいよやつきとなつて、そこらあたりをかけまわる。オツベルの犬も気が立って、火のつくように吠ほえながら、やしきの中をはさまわる。

間もなく地面はぐらぐらとゆられ、そこらはばしやばしやくらくなり、象はやしきをとりまいた。グララアガア、グララア

ガア、その恐ろしいさわぎの中から、

「今助けるから安心しろよ。」やさしい声もきこえてくる。

「ありがとう。よく来てくれて、ほんとに僕はうれしいよ。」象小屋からも声がする。さあ、そうすると、まわりの象は、一そうひどく、グララアガア、グララアガア、塀のまわりをぐるぐる走っているらしく、度々中から、怒ってふりまわす鼻も見える。けれども塀はセメントで、中には鉄も入っているから、なかなか象もこわせない。塀の中にはオツベルが、たつた一人で叫んでいる。百姓どもは眼もくらみ、そこらをうろうろするだけだ。そのうち外の象どもは、仲間のからだを台にして、いよいよ塀を越しかかる。だんだんにゆうと顔を出す。その皺くちやで灰いろの、大きな顔を見あげたとき、オツベルの犬は気絶した。さあ、オツベルは射ちだした。六連発のピストルさ。ドー

ン、グララアガア、ドーン、グララアガア、ドーン、グララアガア、とところが弾丸は通らない。牙にあたればはねかえる。一疋なぞは斯う言つた。

「なかなかこいつはうるさいねえ。ぱちぱち顔へあたるんだ。」
オツベルはいつかどこかで、こんな文句をきいたようだと思
いながら、ケースを帯からつめかえた。そのうち、象の片脚が、
塀からこつちへはみ出した。それからも一つはみ出した。五匹
の象が一ぺんに、塀からどつと落ちて来た。オツベルはケース
を握つたまま、もうくしゃくしゃに潰れていた。早くも門があ
いていて、グララアガア、グララアガア、象がどしどしなだれ
込む。
「牢はどこだ。」みんなは小屋に押し寄せる。丸太なんぞは、マツ
チのようにへし折られ、あの白象は大へん瘠せて小屋を出た。

「まあ、よかつたねやせたねえ。」みんなはしずかにそばにより、鎖と銅をはずしてやった。

「ああ、ありがとう。ほんとにぼくは助かつたよ。」白象はさびしくわらつてそう云つた。

おや一字不明、川へはいつちやいけないいたら。

底本：新潮文庫「新編銀河鉄道之夜」新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

親本：「新修 宮沢賢治全集」筑摩書房

入力：r.sawai

校正：篠宮康彰

1999年2月6日公開

1999年7月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作に
あたったのは、ボランティアの皆さんです